

## 第八章 最終実験

闇司祭「もうそろそろ暴走する頃だと思うのだけど……いったいつまでキスしてるのかしら？」

ナース「ちゅっ、じゅるるっ、れるう……らって、先生とキスするの気持ちいいんです…  
…唇は、あむっ、こんなにプルプルで……チュッ、唾液も甘くて……んんうっ、ああむっ、  
ちゅっ、ちゅるるっ」

女医「んじゅっ、れるるっ！ そう、そうよ……ただのキスなのに気持ち良すぎるのがいけないのよ……！ さっきからおちんぼもずっと勃起が治まらなくて……あッ、またイク……ッ！ 出る、出ちゃう……！」

ナース「先生、じゃあ私とっ！ んりゅ、ちゅるるっ、キスしながらっ、イキましよう…  
…私もイク、イキますから…んちゅっ、ちゅっ！」

女医「はひっ、ひっ、ひくうううううう…っ！ おちんぽ、イクうううううっ！  
んあああんっ！」

ナース「ふああああっ！ 先生の、熱くて、濃くて臭くて…んひっ、さいこうれ  
すうううううううっ！ ひくううううううっ！ イくううううっ！」

### 【二人の荒い息遣い】

闇司祭「あははっ！ いい具合じゃない！ どう？ 今の気分は？」

女医「そ、そんなの…最高に決まってるじゃない…ッ♪ んあっ、またイクっ♪」

闇司祭「うふふつ、それはよかった。でも、いつまでも呆けてちゃダメよ？　まだメインが残ってるんだから」

マリナ「ッ！」

闇司祭「逃げようとしても無駄よ？　三対一でどうにかなると思う？」

マリナ「卑怯者……」

闇司祭「それにほら、あなたのおちんぽももうそんなに硬くなってるじゃない。もっと気持ちよくなりたいでしょ？　カウパーだらだらこぼして、本当は期待しているんじゃないの？」

マリナ「ちが……っ！ 私はそんな……あっ」

【閨司祭、マリナの手首をつかむ】

閨司祭「はい、捕まえた。うふふつ、残念ね。さあ、お楽しみの始まりよ」

マリナ「なにを……あつ、くっ！」

ナース「尿道口に、器具を挿入……セット完了しました。では、毒液を注入します」

閨司祭「あつ、待つて。この子には特別、原液を味わわせてあげましょう」

マリナ「げ、原液！？」

マリナ（今までも相当辛かったのに、原液なんて……）

闇司祭「あはっ、いい表情になったじゃない。でも怖がる必要はないのよ。毒<sup>ドク</sup>なんて物騒な響きだけど、最高に気持ちよくなれるんだから」

ナース「司祭様。もう注入してもよろしいでしょうか？」

闇司祭「ええ、いいわよ。たっぷり、注いであげて」

マリナ「ちよっ、待っ……んんんうううううッ!？」

闇司祭「やっぱり原液だと反応が段違いね♪ おちんぼが一気にギンギンになっちゃった

♪ それに乳首も、こおんなに硬くなって……指でなぞったら、どうなっちゃうのかしら?」

マリナ「やめ、今触らないで……あああッ！ おんッ、おおお……！」

闇司祭「色気のない声♪ まるでケダモノね。でも、嫌いじゃないわ。ピンピンになった乳首も可愛くて……ふうー……っ」

マリナ「んあッ！」

マリナ（ダメ、これ……！ 息だけでイっちゃいそう……！ 乳首痛いくらい尖って、苦しい……！）

闇司祭「そんな顔されたら、ますますいじめたくなっちゃう♪ ふっくり膨らんだ乳輪なんて、どうかしら？ こうやって……クリクリクリっ♪」

マリナ「んふあつ、あくつ……あおおッ」

闇司祭「まるで鯉みたいにビチビチ跳ねて、おちんぽも今にもイきそうなくらい揺らして……すごくエッチだわ。チュッ」

マリナ「んひいいッ！？　ち、乳首、吸わないでっ！」

闇司祭「ダメよ。だってこんなにおいしそうなんだもの……チュッ、んぢゅっ、ちゅうううううッ！　あむっ、れろれろっ、ああむっ、んふっ……」

ナース「司祭様。お楽しみ在所申し訳ありませんが、二本目投入します」

闇司祭「ん……ぢゅぱっ。ええ、どんどん追加して。もっとおかしくなるまで」

女医「どうせだから、私は右の乳首を貸してもらわ」

闇司祭「あら。案外乗り気なのね。まあいいけど……はぷっ」

女医「あむっ。ちゅりゅりゅっ、れろ、れる……んっ、はむっ」

マリナ「ああおっ、おっ、おほおおおお……ち、ちくびがあああんっ！」

闇司祭「膝までガクガク震わせちゃって……そんなに気持ちいいのね♪　じゃあもつと楽しませてあげなきや……あむっ」

マリナ「ちくび、噛むのだめえええ……っ！　ちくび、とれるっ。とれちゃうっ。もうむりいっ！」



女医「大丈夫よ。人間の身体はそんなヤワじゃないから」

闇司祭「お医者さまからのお墨付きもらっちゃった♪　じゃあ、遠慮なく出来るわね……  
はふっ、れろれろれろ、んれろっ、んじゅっ、チュツチュツ」

ナース「三本目、入ります」

マリナ「も、もういらない……気持ちいいの、つらい……これ以上やったら、ほんとにお  
かしくなっちゃう……」

女医「ふはっ。だから言ってるでしょ？　これには精力を回復させる効果もあるの。だから心配せず、頭バカになるまで気持ちよくなっていいのよ……あむ、あむ」

マリナ（ダメ……何を言っても、許してもらえない……気持ちよくて、つらくて、でも…

…)

闇司祭「れろれるう……あら？　気を失ってる？」

ナース「三本目が入ると同時、落ちました」

女医「そう。反応がないとつまらないわね。せっかくだから、新しい刺激を与えましょうか」

【女医、オナホを持つ】

女医「注入器を外してくれる？　……そう、いい子ね、ありがとう。じゃあ、次はこのオナホの中にもたあつぷり原液を塗りこんでえ……あとはこのギンツギンになったおちんぽ、に……っ」

マリナ「くくくッ!？」

闇司祭「あ、戻ってきた。気絶した分の快感を一気に味わってるのね♪ 顎を反らして舌まで出して、アクメのことしか考えてないいい顔になってきたわ♪」

女医「戻ってきたところ悪いけど、まだ終わってないわよ？ オナホをこうやって、ぬちゅっ、ぬちゅっ♪ 上下に動かして……」

マリナ「うあ、ああんっ！ ひぐっ、おうッ！」

闇司祭「それはなんてダンス？ 自分から腰を振るなんて感心ね」

女医「ふふ、もう弱い所も全部把握してるから♪ ほうら、ぬぷぬぷ……ぬぷぬぷぬ

ふ……」

マリナ「いああッ！ はひっ、ひんっ、あおうッ」

闇司祭「やっぱりオナホが好きみたいね。さっきまでとは反応が段違いだわ」

ナース「鼻水まで垂らして無様によがっていますね。みっともない有様です」

闇司祭「それにしても今回は、精液が止まらないトロトロ現象が出ないわねえ……」

ナース「……快樂責めをもっとねちっこくやればそのうち出ると思います」

闇司祭「それもそうね。もっと責めたら出るかもしれないわ」

女医「そういうことなら……さあ、次はもっとすごいのをしてあげるわ♪ 私のお口で、この真っ赤に腫れた亀頭を優しく食べてあげる……ああー……んっ」

マリナ「うひいッ！？ んぁおッ、ほっ、ほっ……！」

闇司祭「口に含まれただけで甘イキしちゃったみたいね。私も見ていただけじゃつまらないから……そうね。次はお耳をいじめてあげる」

ナース「では、私は唇を」

【闇司祭、マリナの耳元へ】

闇司祭「あらあら……耳まで真っ赤になって、恥ずかしいのかしら？ 気持ちよくて？ それとも、どっちも？ ……あむっ。んじゅぶっ、れろろ、れるっ、んぢゅぢゅっ、ぢゅ

びっ」

マリナ「あはっ、はあああ……あっ、あっ、みみ、あ……」

闇司祭「あむっ、はぷっ、んむっ……お耳、小さくて可愛いわあ。耳たぶもコリコリしてて、美味しい♪ ふちゅっ、ちゅるるっ、れろろろっ」

女医「亀頭も、果実みたいで食べごたえがあるわ……パンパンに張りつめてて、おつきくて……顎が外れちゃいそう……あむっ、はむっ、ああむ、んうう……っ」

マリナ「ふひや、やんっ！ んんううう……んむっ！？」

ナース「んじゅっ、れりゅっ……うるさいお口は、塞いでしまいます……むちゅっ、んんっ、れろろっ、れちゅっ」

マリナ「んぷあつ、んんうツ！　べろ、入って……んふあ、ひやああ……れう、れう……」

ナース「れろれろ……んちゅつ、れるつ、れるるつ。自分から舌を絡めてきておりますが？」

女医「腰も振り始めたわね。意識はどうあれ、身体はもうすっかり堕ちきってるわ」

闇司祭「じゅるるる……んじゅるつ、ぷじゅつ、限界間近ってところね。後ほんの少しのきっかけさえあれば、素直になつてくれるはずよ」

女医「じゃあ、最後の一押しは……任せるわ」

闇司祭「あら、ありがと。じゃあ、原液を口に含んで、と……んっ」

マリナ「んむうッ！？ んーっ！ んーっ！」

マリナ（いや、ダメ……流れ込んでくる、飲みたくないのに、美味しい……！）

マリナ「じゅるっ、ごきゅっ、ごきゅっ、んぐっ、んふううう……ぴちや、ぴちや、くちゅっ、ちゅちゅうううう……！」

マリナ（美味しくて、気持ちよくて……もう……イクッッ！）

女医「んぶっ！？ んぎゅっ、ごきゅっ、きゅっ、んくっ……んぷっ」

ナース「射精を確認。それにしてもすごい量ですね。今までで一番ではありませんか？」



闇司祭「たぶん原液を飲んだからね。精力も最大限までブーストされているはずよ♪ ふつ、もうほとんど意識も残っていないのでしょうね。本能のまま腰をへこへこ動かして、射精のことしか頭にないって顔になっているもの」

女医「ぐぎゅつ、んぎゅ、んつ、んつ……んええッ！ げほつ、えほっ！」

闇司祭「あらら。やっぱり全部は飲みきれなかったみたいね」

ナース「精液まみれの先生、すごくエッチで素敵です……」

闇司祭「ふふつ。やっぱりあなたは彼女の相手をした方がよさそうね。あの子は私が可愛がるから、そっちをお願いできるかしら？」

ナース「はい。先ほど焦らされた分、たっぷり可愛がってもらいます」

【ナース、女医の方へ】

闇司祭「さて、と。後は私たちだけになったわけだけど、当然責めが緩まるわけじゃないから安心してね」

マリナ「あつ、お……イツ」

闇司祭「失神寸前って感じね。でもまだおちんぽは元気みたいだから、たっぷり楽しんでおきましょう」

闇司祭「んっ、しょ。ほら、見える。今からあなたのおちんぽを私のおっぱいで包んであげるの。素敵でしょう？ オナホなんか比べ物にならないわよ。ふわふわで、あったかく

て、やわらかあいおっぱいの虜にしてあげる」

闇司祭「ほおら……すっぱり♪ おちんちん、おっぱいに食べられちゃったわね♪ この  
ままゆっくり、ずり、ずり……ずりずりっ」

マリナ「おほっ、ほっ、ほおっ」

闇司祭「あははっ、唇尖らせて腰引いて、すっごく間抜けだわっ。ほらほら、休んでるひ  
まはないわよ？ ぎゅむっ、ぎゅむっ……しっ、しっ……」

マリナ「あひっ、ヒイツ！ イクッ！ イクううッ！」

闇司祭「はい、すぐイっちゃったわねっ♪ うふふっ、ちよおつと歯ごたえがなさすぎ  
じゃないかしら？」

マリナ「うあつ、はひつ、ひつ、おおお……ッ」

闇司祭「あら、また？ そんなに腰へここして、よつぽど射精が気持ちいいのね。おちんぽからビュービュー出すの、そんなに好き？」

マリナ「ひくつ、ううう……ああッ！ あッ、あッ！」

闇司祭「うーん……こんなに弱いとイマイチ面白みに欠けるわね。じゃあ、ちよつと趣向を凝らしてみましようか」

【闇司祭、身体を離して】

闇司祭「それじゃ、注入器をセットして、と……ふふつ。この際だし、私も原液を入れて

みようかしら♪　せつかくだもの。もつともつと、気持ちよくならないとね……んんっ♪」

闇司祭「あはっ、ああ……これ、やっぱりたまらないわあつ。尿道の中を毒液が伝っていく感じ……背筋がゾクゾクして、おちんぼも疼いちやう……ッ！」

闇司祭「はぁ、はぁ……んんっ。身体、どんどん熱くなってきたえ……おちんぼ、ちんぼも爆発しちやいそう……♪　膀胱がバカになっちやいそうなこの感覚、病みつきになっちやいそう……っ♪」

闇司祭「んはっ、ふうっ、うっ……あはぁ……もう終わっちゃったあつ。でも、あなたにはちようにいいインターバルになったんじゃない？」

マリナ「はぁ、はぁ……う、うるさい。そのまま一人でバカやってればよかったのよ」

闇司祭「減らず口が戻ったならもう大丈夫ねっ♪　じゃあ、ちよつと可愛がつてあげるわ」

【闇司祭、マリナの正面へと移動】

闇司祭「兜合わせて、知ってる？　こうやって……んっ。私とあなたのおちんぼを擦り合わせるのっ」

マリナ「くうっ、うう……何よ、これ……ッ！」

マリナ（こいつのおちんぼ、熱くて硬い……それに先走りがっ、ローションみたいになっ  
て……気持ちいい……ッ！）

闇司祭「あははっ、気に入ってくれたみたいで何よりだわぁッ♪ ほら、こうやってえ…  
…ずり、ずり……ずりずりッ」

マリナ「んはぁッ！ あんううう……！ き、汚いの押しつけないで……ッ！」

闇司祭「ふふっ、腰を動かしながら言っても説得力ないわよ？ ほらほら、もっと楽しみ  
ましょうよッ♪ おちんぼ擦り合わせるの、気持ちいいでしょう？」

マリナ「だまりな、さい……ッ！」

闇司祭「あはッ！ キ、くう……ッ！ 今のちんぼビンタ、すごくよかったわぁ…  
…ッ！」

マリナ「やっぱりあんた、マトモじゃないわ……このマゾッ！」

闇司祭「んほおお……ま、また、今度は逆からあ……往復ちんぽビンタ、すごい……ッ！」

マリナ「そんなにッ！ 好きならッ！ いくらでもッ！ やったげるわよッ！ このッ！ 変態ちんぽ女ッ！」

闇司祭「はおッ、ほおおッ！ れ、連続で叩いてくるなんてえッ♪ ちんぽ痛いのにッ、気持ちいいッ！ あおおおッ！」

闇司祭（嗚呼、本当にすごいわ……！ いい具合に、私もこの子も壊れてきてる……ッ！）

闇司祭「もっと、もっとしてえッ！ おちんぽバカになるまで叩いてえッ♪」



マリナ「言われなくても……お望みどおり、やってやるわよ……ッ！ とつと伊きなさい、このマゾ女ッ！」

闇司祭「んひっ！ んんぐうううう……ッ！ い、痛氣持ちいい……ッ！ あえええええ……ッ！」

マリナ「んあッ、アツッ！？ ちんぽ汁かって、私も……くくくッ！」

闇司祭「あああああ……しやせえ、とまらないいい……おちんぽバカになっちゃったわああ……っ♪ おおおつ、ちんぽ、ちんぽおお……ッ！」

マリナ「はあ、はあ……んつくつ。んああつ、またイク……しやせえ、とまらない……はふつ、ひああつ」

闇司祭「ふう、ふう……今の、最高だったわ……案外あなた、Sの素質あるのかもしれないわね。……まあ、本質的にMだから責める時もやりやすいのかも」

マリナ「うる、さい……あなたよりはマシよ、ドM……」

闇司祭「ふふつ、ずいぶん口が回るようになってきたわね。なら、またお胸で挟んであげるわ。さつきみたいにすぐイったりしないでね？ つまらないから」

マリナ「……ッ！」

闇司祭「あら？ 表情が変わったわね。そんなに怖い？ それとも、楽しみで仕方ないのかしら？」

マリナ「誰が……ッ！ さつさとやればいいでしょう！」

闇司祭「怖い怖い。でもいつまで強気でいられるかしらね♪」

【闇司祭、マリナの正面へ移動】

闇司祭「ふふっ、射精したばかりなのにもうおつきくしちゃって。毒液の効果………だけじゃないわね。よつぽどパイズリが気に入ったみたい♪」

マリナ「……ッ」

闇司祭「あらあら、押し黙っちゃって。我慢してるのが丸わかりよ？ ……まあ、そういうところが可愛いんだけど……ねっ。ほおら、すっぽり♪ どう？ 気分は？」

マリナ「最低の気分よ……」

闇司祭「あらそう。でも関係ないわ。あなたがどうだろうが、私には関係ないもの……それじゃ最初はゆうつつつくり虐めてあげるわ……こうやって、ずりずり……にゆぷ、にゆぷ……」

マリナ「んくっ、んんうう……ふう、ふう、ふう……ッ！」

闇司祭「いいわね、その顔。最高だわ……歯を食いしばって必死に耐えようとしているのね。おちんぼからだら先走りこぼしてるけど、健気で可愛いわ♪　じゃあ、徐々に強くしていくわね……っ」

マリナ「はっ、ああ……人の身体、好きにして、え……ッ！」

闇司祭「少し声が震えてきたわね。必死に腰を浮かせて……ほらほら、まだこんなものじゃないわよ♪ 頑張りなさいっ♪」

マリナ「くはっ、んああッ！ ふぐ、うううう……はあはあはあ……」

闇司祭「顔真っ赤っ♪ うふふっ、亀頭もすっかりパンパンになっちゃって……ああむッ♪」

マリナ「ひああああッ！ そこ、ダメエッ！」

闇司祭「んじゅるっ、じゅるるるるっ！ んふっ、そんなこと言われてやめるわけないでしょおっ♪ じゅるっ、じゅぷぷっ、んぢゅううううう……ッ！」

マリナ「ああああああ……吸うの、いやあ……はげし……ッ！」

闇司祭「じゅりゅっ！ ふじゅりゅるる……あむっ、はぶっ、あむあむあむ……」

マリナ「はうっ、はっはっ、先っぽ、あまがみ……いひっ！」

闇司祭「もう限界？ さっきよりは頑張ったみたいだけど、やっぱり雑魚ちゃんぽねっ♪  
……でも、ダメよ。まだ射精させてあげない」

マリナ「ふえっ？ あ……どう、して……？」

闇司祭「クスッ♪ その顔、傑作だわ。もうすっかり射精のことしか頭にないじゃない」

マリナ「な、あ……ッ！ この、異常者……ッ！」

闇司祭「クスクス♪ ちゃんとイかせてあげるからそう怒らないの♪」

マリナ「あつ、くっ!？」

闇司祭「不意打ちは効くでしょ？ 先っぽにこうやって……乳首を擦りつけてえ……根元からぐりぐり、ずりずりすればあ……」

マリナ「くうつ、んんうああああッ！ あっあっあっ！ 出る、せーえき、でちやううう……!」

闇司祭「じゃあ、これでトドメよ。さあ、思う存分イきなさい」

マリナ「ッ！ んぐつつつ、ああッ！ 出、る……ッ！ 出てるうう……ッ!」

闇司祭「すごい量ね……もう何発も出しているのに、まだこんなに熱くて、濃い……ん  
ふっ、惚れ惚れしちゃうわ。とつても素敵なおちんぽねっ♪ 毒液の効果があるとしても、  
やっぱり魅力的だわ♪」

マリナ「はぁあっ、射精、射精、とまらないいい……きもちいいよおお……  
はぁはぁはぁ」

闇司祭「って、聞いてないわね、この様子じゃ。一応褒めてるんだけど……まあいいわ。  
結構キマってるみたいだし、もう一本くらい注入しても問題ないでしょ」

マリナ「ま、また……？」

闇司祭「いやかしら？」



マリナ「……いい、いいの。もっと、入れて……気持ちよくさせて……また、気持ちいいのほしいの……」

闇司祭「……ぷっ、くっ……あははっ！　いいわね、やっと調子が出てきたじゃない。お望みどおり、壊れる程愛してあげるわ」

マリナ「んああ……尿道、擦られるの、すきい……」

闇司祭「素直になったみたいで何よりだわ。じゃあ、また原液を……っつと」

マリナ「ふああああ……尿道のぼってきてる……膀胱たまってる……」

闇司祭「あはっ、もうすっかり癖になってるみたいね。おちんぼを尻尾みたいにぶんぶん振って、可愛いわ」

マリナ「だってえ、これ、いいのお……おちんちん、もつとしてえ」

闇司祭「うふふつ、いいわよつ。じゃあ、お望み通り……ジュプジュプジュプッ♪」

マリナ「んひああああ……ッ！ 尿道擦られるの、いひいひい……あえええええっ」

闇司祭「涙も鼻水も垂れ流しの仰け反りアクメ♪ 素敵だわ」

マリナ「ひいひいひい……んあッ」

闇司祭「注入器を抜いただけでまたイったの？ 堪え性のないおちんぽねえ……でもそういうところも含めて好きよ……ちゅっ」

マリナ「ちゅっ、んちゅっ、れろろっ、れろれろっ、キス……んっ、れるるっ……んぷっ、ぷあっ……もっとお……んじゅるるっ、ちゅぢゅっ！」

闇司祭「ちゅっちゅっ……もう毒液のせいで頭おバカになっちゃってるのね……んぷっ、ちゅるっ、んれろろっ、んはっ……れろおっ」

マリナ「んじゅるっ、じゅちゅっ、いいの……馬鹿になるくらい気持ちいいから……もう、射精のことしか……ちゅぷっ、考えたくないのお……ああむ」

闇司祭「むちゅっ、じゅるるっ、れるっ……んっ、いいわよ……もっど、忘れさせてあげる……んぷあっ」

【闇司祭、マリナの正面に移動】

闇司祭「ほら、おちんぽシコシコしてあげるわ……オナホなんかじゃなくて、私の手で」

マリナ「あつ、あつ……それ、好き……して、早くおちんちんゴシゴシして……」

闇司祭「焦らないでもやってあげるわ……ほら、シコシコ、ゴシゴシ……亀頭もゆうつくり指でいじってえ……」

マリナ「んああつ、ひくつ、おちんちん、気持ちいい……手コキ、いいのお……」

闇司祭「少しずつ、握る強さも変えてあげる……こうやって、ぎゅむぎゅむっ♪」

マリナ「んあつ、あつ、あああっ！ おちんちん、つぶれちゃうっ、つぶされちゃうっ……っ！」

闇司祭「クスクス♪ でも、そうされるのが好きなんでしょ？ ほら、もう精液もこおんなに漏らして……手がベタベタだわ♪ 亀頭にもお汁をたあつぷり塗ってあげる」

マリナ「んひああ……っ、んっ、おちんちん、破裂しちやいそう……っ」

闇司祭「ふふふっ、まだ終わってないわよ？ ほおら、シコシコ、ゴシゴシ……もう我慢なんてする必要ないのよ？ だから思う存分、好きなだけ、精液出しなさい……」

マリナ「え、ええ……そうよ、もう我慢なんてできないっ、したくないい……っ！ だから、らからあ、またイクのお……せいえき、でるう……っ！ ふああああっ！」

闇司祭「本当、底なしね……ビュービュー溢れて、まるで噴水みたいだわ♪ イきながら射精するの、たまらないでしょう？」

マリナ「ひくっ、んんううああああっ！ イクイクイクううううッ！」

闇司祭「すごいいきっぷり♪ 今までたっぷり我慢していたみたいだから、その反動かしら？ 精液と一緒に知性まで出してるような顔してるけど♪」

マリナ「らってえ、しゅごいのお……こんなに気持ちいいの、はじめてえ……しやせい、さいこおおお……っ」

闇司祭「うふふふっ、そこまで言ってもらえると光栄だわ♪ じゃあ、つぎはあ……そうね、してばかりもなんだし、被検体ちゃんの口からリクエストを聞かせてもらおうかしら♪ 何がして欲しいとか、ある？」

マリナ「……ッ、じゃあ、アレ、して……かぶと、あわせえ」

闇司祭「ああ、アレね♪ そう、アレが好きなの♪ じゃあ、リクエスト通りやってあげるわ……まずは、こうやってお互いのおちんぽをずり、ずり擦り合わせてえ……ふふっ、皮の裏側に亀頭をもぐりこませると、とおつても気持ちいいでしょお？」

マリナ「うああっ、ひっ、んくううっ……おちんちん、あつい……やけどしちゃいそう……」

闇司祭「被検体ちゃんのおちんちん、ビクビクして可愛いわあ……♪ ほらほら、あなたも動いて……すりすりすりすりっ♪」

マリナ「ああっ、あっ、くひうううっ！ 先っぽ擦り合わせるの、すごい……こし、勝手に動いて止まらないのお……んんうっ！ もっと、もっとお、動いてえ……ッ！」

闇司祭「ええ、いいわよ……ふふふっ、先走り汁ドロドロにして、そんなに気持ちいいの

ね……私も、なんだか火照ってきちゃうわ……♪ 被検体ちゃん、いい反応ばかりしてくれるから嬉しいわ♪」

マリナ「はひっ、んくうっ、ふうふうふう……っ」

闇司祭「あら、腰振りに夢中で聞いてないって感じね。じゃあ、次はこうしてあげる、わっ！」

マリナ「んひいいいいんっ!? おちんちん、ぶたれたああああ……っ!」

闇司祭「あなたが私にしてくれた事よ? ほら、もういち、どっ!」

マリナ「んはあああああッ! い、いたい……! きもちいの  
のおおおおっ!」



闇司祭「やっぱり被検体ちゃんもドMじゃない♪ ほらほら、まだ終わらないわよ？ いち、にっ♪ いちっ、にっ♪」

マリナ「んひあっ！ ああああっ！ いたきもちいいのおっ！ おちんちん、もげちゃうっ！ 先っぽっ、ジンジンしてっ！ びりびりしてえっ！ んおおおおおっ！」

闇司祭「クスクス♪ 腰ガクガク震えてきたわね？ ここらで一回、アクメしちゃいなさいッ♪」

マリナ「んくっ、んんううあああああああッ！ イくううう……っ！ おちんちん、しやせえ、とまらないいいいい……っ！ ふああっ、せーえき出すの、きもちいいのおおおお……っ！」

闇司祭「んあッ、アッ……っ！ 私も、イっちゃう……っ！ 射精しながらおちんちん擦り合わせるの、たまらないわあ……♪ もっともつと、射精したいのお……♪」

マリナ「……ッ、んあッ、しえーえき、どろどろお……っ」

闇司祭「うふっ♪ すっかり満足しきつてみたいけど、まだよ。次はこれ。何かわかる？ いつもと違う、貫通式のオナホよ♪ これをこうして、お互いのおちんぽを入れれば……♪」

マリナ「ふあッ、ああ……？ なに、これ……？」

闇司祭「うふふっ、気持ちいいでしょう？ オナホがきゅうきゅう締めつけてきて、おちんちんの先っぽ同士がキスをして♪ このままこうやってうごけばあ……♪」

マリナ「あああっ！　こ、これ……やばっ」

闇司祭「ふうっ、ふっ、今まで感じたことない……気持ちよさでしょう？　私も、これ……好きいつ♪」

マリナ「す、すごい……おちんちん同士がこすれ合って、オナホでギュッて密着させられてえっ！　お、んうううッ！」

闇司祭「被検体ちゃんと私の精液が中でぐちゃぐちゃに混ぜられているのがわかるでしょう？　ぴっちり密着し合うと、おちんぼの動きとかっ、熱さとか……♪　ぜえんぶ伝わってくるでしょお……♪」

マリナ「え、ええ……今までと、全然違う……っ！　ああっ、んひああっ！　ふうふうふう……っ！」

闇司祭「気に入ってくれたようで何よりだわっ♪ さあ、もっと動いて……一緒に気持ちよくなりましょう……すりすりすりっ♪ ぐしぐしぐしっ♪」

マリナ「ひいひいひい……っ！ おちんぼっ、おちんぽおっ♪ んはあああああっ！」

闇司祭「ああ、被検体ちゃんのおちんぼ、ビクビクしてきて……私も、もう限界っ♪ さあ、一緒にイきましょう……♪」

マリナ「んっ、ううんっ！ イ、イクっ！ イくからあっ！ はげしくしてっ！ してよおっ！」

闇司祭「わかってるわよお……えいっ♪」

マリナ「んんっ、ぐううううっ！ おちんぼの先、つぶれて……ひぐうううっ！ イ  
くっ！ イくイくイくうううううううっ！」

闇司祭「あっはああああああっ！ オナホの中で、精液溢れて……熱くてねばねばで気持  
ちいいのおおおっ♪ 被検体ちゃんのおちんぼ、ビンビン跳ねてっ♪ ん  
ふううううううっ♪」

マリナ「あはっ、あああ……しえーえき、しやせー……んああっ」

闇司祭「ふう、ふうふう……あら？ 落ちちゃったみたいね。でもおちんぼはまだ元気に  
ビクビク動いているわ……♪ じゃあ、もう少し……」

ナース「司祭様。お楽しみの所申し訳ありませんが、すでに、ノルマは達成しております」

闇司祭「あら？ ……ああ、本当だわ。夢中になっていて気づかなかったけど、もうずいぶん出していたのね。じゃあ、とりあえず今日はこれくらいにしておくわ♪ 被検体ちゃん、ご苦労様♪ ゆっくり休んでちょうだいね」

マリナ「はひつ、ああん……ひもうと、いもうとお……わたし、やったあ……ははっ、あはは……」